

一八八四年五月二十五日(日)

タクール、聖ラーマクリシュナ、ドツキネンシヨル南神寺院において——誕生祝いの日に
ヴィジヤイ、ケダル、ラカール、スレンドラ、その他の信者たちと共に

五聖樹の根台で誕生祝いにヴィジヤイ等信者たちと共に

タクール、聖ラーマクリシュナは、パンヂヤパティ五聖樹の杜の古いパニヤン樹の根台の上に、ヴィジヤイ、ケダル、スレンドラ、バヴァナート、ラカール等、大勢の信者たちといっしょに南向きに坐つていらつしやる。何人かの信者たちは台座の上に坐り、大部分は台座の下でここに立っている。時間は午後一時ころ。日曜日でキリスト暦一八八四年五月二十五日。ベンガル暦一二九一年ジヨイスト月十三日白分ツイヒ一日。

タクールの誕生日はファルゲン月の白分二日である。しかし、腕を怪我なさったのでその日に誕生祝いをしなかった。いまは大そう良くおなりになったので、今日、信者たちが集まつてお祝いをするところなのだ。ある女性が歌をうたうことになっているが、その女性は非常に才能のある人で、有名なキールタン歌手である。

校長は、いつもの部屋にタクールが見えないので五聖樹パンチャパティの柱に来てみると、信者たちが笑顔で——皆で楽しそうにしている。タクールが樹の根元の台座に坐っておられるのに気が付かず、すぐその真向かいに来て立ち止まった。そして気ぜわしげに、「あの方は何処どこにいらっしやるのかな？」と聞いたので一同は爆笑した。ちよつと見ると真正面にタクールがいらっしやる。彼は慌てふためいて地面ぬかに額ぬかずいてごあいさつ申し上げた。見ると、タクールの左側にケダル（チャトジェー）とヴィジャイ（ゴースワミー）が並んで台の上に坐っていた。タクールは南向きに坐っておられる。

聖ラーマクリシュナは笑いながら校長に向かつて——

「ほら、二人（ケダルとヴィジャイ）をこんなに仲良くさせてやったよ！」

キリスト暦一八六八年に、タクールは聖なるプリンターヴァンの牧場からマドヴィーの若木を持ってきてここにお植えになった。それが今では大そう大きくなっている。小さい子供たちが登っては、揺すったり動かしたりしている。タクールは楽しそうにそれを眺めながらおっしゃった——「まるで猿の子だね。落ちても止めやしない」スレンドラが根台の下に立っている。タクールはやさしく声をおかけになった——「上においでよ。（足を伸ばして）こうやってると、とても具合がいいよ」

スレンドラは上に行つて坐つた。バヴァナートが洋服を着ているのを見てスレンドラは聞いた——「君、イギリスへ行くのかい？」

タクールは笑つてこうおっしゃった——「わたしらのイギリスは神様のところさ！」そしてタクールは、信者たちといろいろな問題について語られた。

聖ラーマクリシユナ「わたしは時々、うれしくてたまらなくなつてね、着てるものを脱ぎ捨てては歩き廻つたものだよ。ある日、シャンブーがこう言った——『まあ、あんたは素っ裸になつて歩いて——気持ち良さそうにね！——私はいつか見てましたよ』」

スレンドラ「会社から帰つてきて上衣ジャマや外套チャブカンを脱ぐとき、私はこう言うんです——『マー、あんたはこんなにして私を束縛している』」

〔スレンドラの会社——八つの紐ひも帯と三つの性格グナ〕

聖ラーマクリシユナ「八つのヒモで縛られているんだよ。恥ずかしさ、怒り、恐れ、カーストの誇り、遠慮、隠し事など——こんなもんだ」

タクールは歌をおうたいになる——

私は悲しい、情けない

あなたという母親がついていて

しかもハッキリ目覚めているのに

我が家に盗人がしのびこむとは

一八八二年十月二十七日に全訳あり

この世の市場のただ中に

シャーママかあさま 風かぜあそび

希望のぞみの風かぜにあがり行く

風かぜをつなぐは執マキ着ヤキの糸

一八八二年十月二十七日に全訳あり

「マーヤーの糸とは妻子のことだよ。俗事の地面に糊つき糸でしっかりつながれている。俗事——つまり女と金」

ここへ来たのはサイコロ勝負あそびの

大もうけしようと期待して

胸もワクワクめくった札は

先ずは最初に五の数字

何度も何度も十二、十八、十六

次々いい札出してよろこんで

次にめくった十二の札

最後にこれじゃ役にゃ立たねえ

五の札、六の札にしばらくは

六と二の札、合わせて八

次は六と四で、合わせて十

マーよ、ちつとも札に恵まれない

夜中通して興じてみたが、名誉も名声も手には入りやせぬ

「五の札とは、つまり五元素のこと。五の札、六の札にしばらくられるというのは、つまり五元素と六つの敵（恥ずかしき、怒りなどに支配されること。六、三、九をだましてやる——六をだますというのは六つの敵に支配されないこと。三をだますというのは、つまり三つのグナを超越することだ。

サットヴァ、ラジャス、タマス、この三つの性格が人間を支配しているんだよ。三人の兄弟だ。サットヴァがあればラジャスを呼び出すことができるし、ラジャスがあればタマスが呼び出せる。三人とも盗賊だ。タマスは殺す。ラジャスは縛る。サットヴァは縛りをほどく。しかし、神様のところまで行くことはできない」（訳註——タクルは六、三、九をだましてやるの説明をしているが歌詞にその言葉はない）

ヴィジャイ「はつはつはつは、サットヴァも盗賊なんですか？」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、神様のところに連れてつてくれることは出来ないがね、でも、その道を教えてはくれるさ」

バヴァナート「ウワッ！　すごい話だなあ！」

聖ラーマクリシュナ「そうさ、こりやとても高貴な話なんだよ」

信者たちはこのような会話を聞いて心から喜んでいた。

ヴィジャイ、ケダルたちに対して女と金についての教訓

聖ラーマクリシュナ「東縛の原因は女と金だ。女と金こそがこの世のカセだ。女と金が見神させてくれないんだよ」

こう言つてタクールは、ご自分のタオルをとつて顔をお隠しになつた。そして、「こうやつて、お前たち、わたしが見えるかい？ この覆い幕だよ！ この女と金の幕が除れてはじめて、チダーナンド（智慧と至福）が得られるんだよ。

いいかい、妻を持つ喜びを捨てることは、つまり、この世の幸福を捨てることなんだよ！ 神様はそのスグそばなんだ」

ある者は坐り、ある者は立つたまま黙つてこの話を聞いていた。

再び、ケダルやヴィジャイたちに向かつておっしゃる——

「妻を持つ幸福を捨てることは、この世の幸福を捨てることだ。この女と金が覆い幕なんだから——。お前たちはそんな立派なヒゲをはやしているが、それでもお前たちや女と金から動きがとれないでいる！ 何か言つてみる！ 心の中をよよく見つけてみる！」

ヴィジャイ「はあ。——全く、ほんとでございます」

ケダルは言葉もなく黙りこくつている。タクールはおっしゃる——

「見渡したところ、みんな女の尻に敷かれている。キャプテンの家に行つたとき、そこからラームの

家に行こうと思って、『馬車賃をおくれ』と言った。キャプテンのやつ、女房に話した！ 女房は、『どうしたんですか、どうしたんですか』と言いだした。とうとうキャプテンは、『あの人(ラーム)たちが出してくれますよ』という返事だ。ギター、バーガヴァタ、ヴェーダーンタ、束たばになっても女にやかなわない』(一同爆笑)

金も財産もみんな女に握られている！ それでいてこんなことを言う——『私は二タカの金も手許てもとに置くことができます。いったいどういう生まれつきなのでしょう！』

えらい旦那のところには沢山仕事があるのに、誰も廻してもらえない。ある人がこう言った。『ゴラビーに頼め、そうすりゃ仕事ももらえる』——ゴラビーはその偉い旦那めかけの妾めかけなんだ』

〔以前の話し——要塞見物——女と坂道〕

「男どもは、自分がどんなに下がっていくのか気が付かない。いつか馬車で要塞に行つたとき、わたしは平らな道を進んできるとばかり思っていたよ！ あとで気が付いたら、四階も低いところまで来ていた！ 坂道だったのさ！ 悪霊に憑かれています人間は、自分が悪霊に憑かれていることに気が付かない。大丈夫だ、健康だと思つているものだ」

ヴィジャイ「ははははは、祈禱師に会えばお祓はらいをしてくれます」

聖ラーマクリシュナは、この言葉にはつきりした返事をなさらなかった。ただ、こうおっしゃった。——「それは、神様の思し召しだよ」

そして、再び女性に関する話をなさった。

聖ラーマクリシユナ「聞かれた人はみんなこう言う——『はい、私の妻は良い性質でございます』と。悪い妻は一人もない（一同笑う）。

女と金の中で暮らしている人は、中毒したようなもので何にも気がつかない。将棋を指している当人は、たいていの場合、正しい駒の動かし方を知らないものだ。そばで見ている人たちがいるんなことに気が付くものだよ。

女性はマーヤーの姿だ。ナーラタはラーマを讃えてこう言ったよ——『おお、ラーマよ、すべての男は君の一部分だ。君のマーヤーの現れであるシーターの一部分が世の女たちである。私はこのほかに何の願望もない。ただひとつ、君の蓮華の足に純粋な信仰を持てるよう、また君の世にも魅力的なマーヤーに惑わされぬようにして下さい！』

〔ギリンドラ、ナゲンドラたちに対する教訓〕

スレンドラの末弟ギリンドラと彼の兄弟の子供ナゲンドラたちが来た。ギリンドラは会社勤めをしている。ナゲンドラは弁護士資格をとる準備をしている。

聖ラーマクリシユナ「（ギリンドラに向かって）お前たちに言っとくが、世の中のことに執着しちゃいけないよ。ごらん、ラカールは智慧と無智との区別がわかった。真実と虚偽うそとが判断できるようになったよ！ だから今は、あれにこう言うんだ——『家にお帰り。時々ここに来て二日位泊まってい

くようにしろ」とね。

それからお前たち、お互いに仲良く暮らしなさいよ。それでこそ本当に幸福になれるんだし、楽しくも暮らせる。役者たちが声を合わせて歌えば芝居も成功するし、見物人も大喜びだ。

神様の方に心の大部分を向けておいて、ほんの少しの心で世間の仕事をするのだ。

サードウの心は神に十二アナ、他のことに四アナ使う。サードウは神のことにだけ心をうんと使うんだよ。ヘビは尻尾を踏みつけられるともう助からない！——シッポが肝心なんだよ」

〔五聖樹の杜で女性歌手のキールタン——突然雲が湧いて嵐となる〕

タクールはジャウ樹台ツタに行かれたとき、シンティーのゴパールに傘のことをお頼みになった。ゴパールは校長に言った——「傘を部屋に持っていくようにと、あの方がおっしゃいましたよ」

五聖樹パンチャパライの杜の根台でキールタンの用意ができた。タクールが来てお坐りになった。女性歌手は歌をうたった。信者たちはその周囲に、ある者は坐り、ある者は立ちして聴いている。

昨日は土曜日でジョイスト月の新月アズワイシャだった。今日は時おり雲が出ていたが、突然風になってしまった。タクールは信者たちといっしょに自室にお戻りになって坐られた。キールタンは部屋で行うことになった。

聖ラーマクリシュナ「(シンティーのゴパールに) えーと、お前、傘を持ってきたかい？」

ゴパール「はあ、いえ。歌を聞いているうちに度忘れしてしまって！」

傘は五聖樹パンチャパテイの柱に置きつ放しになっている。ゴパールは急いで取りに行った。

聖ラーマクリシュナ「わたしも相当慌て者だが、でもこれほどじゃないね！ ラカールときたら又、ある場所に十三日に招待されているのに、十一日だって言うんだから——。

まあ、ゴパールもラカールも両方とも牛飼いだものな！（一同笑う）（訳註、ゴパール——牛飼いの意、ラカール——牛追い少年・カウボーイの意）

それについて、金細工師の仲間の話があるよ。一人の男はケーシヤブといい、一人はゴパール、もう一人はハリ、もう一人はハラという。そのゴパールは牛飼いな意味なんだ！（一同笑う）

（訳註、ケーシヤブ——クリシュナの別名、ゴパール——クリシュナの幼名、ハリ——ヴィシシュヌの別名、ハラ——シヴァの別名。クリシュナはヴィシシュヌ神の化身。つまり、みな神の名をつけているということ）

スレンドラはゴパールに向かって愉快そうに言った。——「クリシュナの君はいずこに？」

ヴィジヤイ等信者たちと共に楽しくサンキールタンを唱う——女性歌手サハチャリーのガウランガの出家の歌

キールタンの女性歌手は、ガウランガの出家をうたい、そのなかに時々、即興の句をはさんだ。

女の人には目もくれず！

それが出家のきまり故

人間の悲しみを除くため

決して女に目もくれぬ

さもなければ無駄になる

神の化身のガウルが命

タクールはガウランガの出家を聴いておられるうちに、立ち上がって三昧にお入りになった。信者たちはお首くびに花輪をかけた。バヴァナートとラカールはタクールが転ばないように、両方から支えている。タクールは北を向いておられ、ヴィジャイ、ケダル、ラーム、校長、マノモハン、ラトウ、およびその他の信者たちは丸くなってタクールを囲んで立っている。ガウランガ自身がここに来て、信者たちと共にハリ称名の大祭をしているようである！

〔聖クリシュナは完全円満なサツチダーナンダであり、個にんげん霊であり、世界である〕

少しずつ三昧は解けて行く。タクールはサツチダーナンダ・クリシュナと話をしておられる。クリシュナという言葉を何度かははつきり発音されるが、あやふやな時もある。

「クリシュナ！ クリシュナ！ クリシュナ！ クリシュナ！ サツチダーナンダ！ お前の姿を近ごろ見ないのは何故だろう！ いまはお前を内にも外にも見ている——生き物、世界、二十四の存在原理——みんなお前だ！ 心も知性もみんなお前だ！ グルの礼拝にこうある。

完全円満なるマンガラの相すがたにして

動くもの動かぬものに遍満し

その(神の)足あとを示したまえる

聖とうときグルに帰命したてまつる

—— ヴイシユヴェシユワラ・タントラ 2 ——

お前こそ完全アカシ円満——そして、お前こそ動くものと動かぬものに遍在している！ お前こそいれもの容器で、お前こそ中身の命のクリシユナ！ 心のクリシユナ！ 知性のクリシユナ！ 真我アトマのクリシユナ！ 命よ！ ああ、ゴーヴィンダの心と生涯！

ヴィジャイも霊的恍惚状態になっていた。タクールはおっしゃる——「パーブ、あんたも無意識になつたのかい？」

ヴィジャイ(謙遜した様子で)——「いえ、そうではございません」

キールタン歌手は再びうたつた——空しくも暗き愛よ！。ここに歌手は即興句を入れて——「常にわが心のうちに留まりたまえ、おお、命の友よ！」タクールは再び三昧境に！——バヴァナートバヴァナートの肩に傷ついた腕をのせられて！

いくらか意識が戻られると、キールタン歌手は再び即興の句を入れた。——「お前のために、すべてを捨てたこの身に、何でこんな悲しみが——」

タクールは、キールタンの女性歌手にノモシカル(ナマスカール)手を合わせて拜をされた。そして、坐つて歌をきいていらつしやる。時々、前三昧状態になられる。女性歌手が歌を止めた。タクールは話をなさる——

〔愛のなかに肉体と世界を忘れる——タクール、信者と共に踊り三昧に〕

聖ラーマクリシュナ(ヴィジャイその他の信者たちに向かつて)——

「愛とはどんなものか。神を愛する人——たとえばチャイタニヤデーカア様のような——。その人は世界を忘れてしまい、これほど馴染み深い自分の肉体のことまで忘れてしまふんだ！」

愛があればどんなふうになるか、タクールは歌をうたつて教えて下さる——

ハリの名呼ぶと涙が落ちる (それはいつの日、いつなれる)

ハリの名呼ぶと身の毛が逆立つ (それはいつの日、いつなれる)

ハリの名呼ぶと欲みな消える (それはいつの日、いつなれる)

苦しい時は去り、めでたい時のくる (それはいつの日、いつなれる)

ハリのお慈悲のかかるのは (それはいつの日、いつなれる)

タクールは立ち上がつて踊つていらつしやる。信者たちもいつしよに踊り出した。タクールは校長の腕を引っ張つて踊りの輪の中にお入れになった。

踊っているうちに再び三昧に入られた！ 絵に描いた人物のように立つておられる！ ケダルは三昧が解けるようにと讃詞スタヴを称えた——

心の蓮華の中心、絶対にしてすべてに超越し

ヴィシユヌとシヴァとブラマーを学び得る

ヨーギーが最深の瞑想によりて至り得る

誕生と死と苦をことごとく滅し去る

真理の智、存在の本質、すべての世の種子なる

至聖のブラフマン意識を礼拝し奉る (サンスクリット)

次第に三昧は解けてきた。タクルルは座につかれて称名をなさる——「オーム、サッチダーナンダ！

ゴーヴィンダ！ ゴーヴィンダ！ ゴーヴィンダ！ ヨーガマーヤー！——バーガヴァタ、バクト、

バガヴァン！」

キールタンと踊りの場所にある塵チリを拾い上げて額にあてられた。

出家のきびしい誓願——出家と人びとの教導

タクルルはガンジス河に面した円ベランダに坐っておられた。そばにヴィジャイ、バヴァナート、

校長、ケダル、その他の信者たちがいる。タクールは時おり、「ハー、クリシュナ、チャイタニヤ！」とおっしゃる。

聖ラーマクリシュナ(「ヴィジャイたちに」)部屋でハリ称名をたくさんしたから、盛り上がったね!」
バヴァナート「その上、出家の話まで出ました!」

聖ラーマクリシュナ「アハー! 何て素晴らしいんだろう!」
こうおっしゃって歌をおうたいになった――

神の子ガウル、愛のたからを分け

次々と壺に注げど

愛の水 尽くることなし!

満月のごと めでたきニタイは

われを呼ぶ 来たれ 来たれ! と

満月のごと めでたきガウルは

われを呼ぶ いざ来たれ! と

かの安らげき町は今しも

愛の水あふれて河に
諸人はよろこび泳ぐ

聖ラーマクリシユナ「(ヴィジヤイに) キールタンでいいことを言ったね——

出家は女に見向きもしない、それが出家のきまりゆえ——すばらしいねえ！」

ヴィジヤイ「まことに、その通りでございます」

聖ラーマクリシユナ「出家の行いを見て、皆が見習うんだよ。だから大そうきびしい戒律を守るんだ。出家は女の絵さえ見ようとしなさい！ これくらいきびしい戒律なんだよ！

黒い牡山羊を大実母へお供えするんだが——ほんの少しのキズがあつてもいけない。女と交わつていけないどころか、女と話すことさえいけない」

ヴィジヤイ「ハリダース青年が信者の夫人と話をしたので、チャイタニヤ様はハリダースを追放なさいました」

〔以前の話し——聖ラーマクリシユナの名義でマルワリ地方の信者やマトウル氏が金や土地を献じようとしたこと〕

聖ラーマクリシユナ「出家のところ、女と金があるのは——ちよつと美人の体に山羊の臭いがあるようなものだ。そんな臭いがあつちや、美しさもオジャンだよ。」

マルワリの人たちが、金をわたしの名義にしてゆずろうとした。シエジヨさん(マトゥール氏)も土地をゆずってくれようとした。——そういうものは受け取るわけにはいかなかったよ。

とにかく、出家の戒律はきびしい。サードゥウや出家の身なりをしていれば——その場合は正しくサードゥウや出家のように振舞わなくてはいけない。劇場でも見るだろう！ 王様の姿になれば王様のよう
に振舞うし、大臣のなりをすれば大臣のように振舞うだろう。

或る役者が世の中を捨てたサードゥウの役をした。うまく出来たので、見物の旦那衆が彼に金の入った小袋を渡そうとしたら、とんでもない、という顔付きをして楽屋に引きあげた。金にさわりもしないで——。だが、しばらくして顔や手足を洗って、自分の服を着て出て来て、『さっき何かくださいましたね。さア、いただきますよ』と言った。サードゥウの役をやっていたときは金に手をふれることも出来ないが、今は四アナもらっても受け取るというわけだ。

しかし、大覚者の境地になれば子供になってしまう。五つの子供は女も男も区別しない。だが、人を導くために気をつけなければいけないんだよ」

〔ケーシャブ・セン氏が人を教導できなかつた理由〕

ケーシャブ・セン氏は女と金の中で暮らしていた。だから、人々の教導がうまくいかなかつたのだ。タクルルはこの話をなされた。

聖ラーマクリシュナ「あの人(ケーシャブ)はね——わかるだろ？」

ヴィジャイ「はあ、わかります」

聖ラーマクリシュナ「こつちの方とあつちの方と両方もつていたから、何も出来なかつたんだよ」

〔聖チャイタニヤ様は何故、世間を捨てたか〕

ヴィジャイ「チャイタニヤ様はニティヤーナンダにおっしゃいました。『ニタイよ、わたしがもし世を捨てなかつたら、人々のためになることは出来ない。みんながわたしのことを見て、世間のことをしたがるだろうからね。女と金を捨てて、ハリの蓮華の御足に心を全部向けることに、誰一人努力する人はいないだろうよ』」

聖ラーマクリシュナ「そうだ。チャイタニヤ様は人々を導くために世を捨てなすつた。

サードゥや出家サンニヤシは自分の霊的進歩のために女と金を捨てる。自分が心身共に清浄になつたら、こんどは人々を導くために女と金をそばに置かない。欲を捨てた出家はこの世の師！ そのお人を見ただけで人々の靈性は目ざめるんだよ！」

夕暮れが近づいた。信者たちは次々に師を礼拝しておいとまをして行つた。

ヴィジャイがケダルにこう言つた——「今朝の瞑想のとき、あなたの様子を拝見しておりました。お体に手を触れましたら、無いんですよ——誰もいないんですよ！」